

●教育・学務・研究の バランスの中で

大学の専任教員になって四年目を迎えようとしている。あつという間に過ぎた四年というのが第一の感想であるが、振り返ってみると、年々増大

する学務（教務）の中で、担当科目の講義をはじめとする学生への教育と、高等教育を行ううえでの調査・研究の業績の蓄積という三者のバランスの難しさを実感している。

筆者の場合、前職が事務職で一四年ほどのキャリアがあり、その経験が長かったことから、書類や会議録の作成などの事務仕事については比較的苦ではない。しかしながら、研究や教育に力を注ぎたい！と思つて意気込んでいた時期にかぎつて、教務関係の仕事が突然舞い込んでくることもあり、できるかぎり早く確実に処理することで教育・学務・研究の三者のバランスが崩れないように気を配りながら、各授業の準備を進めているというのが現状である。

●基礎的なスキルを身につける必要

学生への教育、つまり授業実践などについては、着任時から試行錯誤の繰り返しであるが、教員歴の浅い筆者にとつては、授業以外にも個々の学生への修学上の相談も含め、個々の学生対応への難しさを年々痛感している。

●私の授業実践——教育現場の最前線から

基礎あつてこそその応用

藤本 頼生 ● 國學院大学神道文化学部准教授



筆者は、神職養成に関わる知識教授中心の講義科目に加え、初年次の基礎演習科目をはじめ、一〜四年次の演習系科目も担当している。同僚の若手教員らのFDに対する意識は高く、本年度からは、副学部長による「突撃FD授業訪問（仮称）」もある。筆者としては着任時から講義科目、演習科目の両方で、できるかぎりワークショップ的なものも取り入れて、学生と教員とが双方向で考えられるような試みを何時間かは必ず行うようにしている。毎年、少しずつではあるが変化を加えながら、単なる知識教授だけでない授業改善を試みているわけだが、簡単に授業の質的転換が成し遂げられるわけではなく、自身の授業運営については、「基礎あつてこそその応用」だと考えている。つまり、教員の経験を重ねていく中で、自分なりのやり方であっても基礎的な教授法、授業構成のあり方をしっかり身につけたうえで、授業改善を試みていかなければ、ただ学生の興味をひくために目新しいことをやっているだけにすぎず、結果的に学生の知識の定着と理解を深めることにはつながらないものと思うからである。

筆者も着任当初は、いわゆるオーソドックスな授業よりも、これからの時代は、とにかく双方向で質的改善、論理的な力を養うことが大事と、これまで見聞きたグループワークやアイスブレイク、KJ法などを用いて、学生相互のコミュニケーションを深める努力や理解のための実践を演習系の授業

で試みていたが、どうも自身の所属する学部では、そもそも神職養成に係る知識教授中心の授業形式が多いこともあって、ワークシヨップ的な授業に学生がうまく乗ってこないという感覚が強かった。むろん、筆者自身にファシリテーターとしての技量が不足しているということもあるが、年を重ねていく中で、演習系の授業、知識教授中心の講義形式の授業ともに、自身の教育上の基礎的なスキルをより高めていくことがまずは先決だと考えるようになっていった。

そのため、自身の教育活動の振り返りの発端ともなった日本私立大学連盟のFDワークシヨップにおいて、小グループに分かれて模擬授業を行った際に指摘、あるいは議論されたことを思い出し、授業を行ううえでの基礎的な教授法（目配せ、間のとり方、話し方の癖、声のトーン、板書法、場面の転換、レジュメの作成の仕方など）、あるいはシラバスや教材、映像資料の使用をはじめとする授業の構成などをもう一度見直して見ることから始めてみることにした。

それは、授業評価アンケートにおいても同様で、学生からの自由記述のコメントなどを見ても、あらためて普段自身が行っている授業で気づかなかった点、配慮が足りなかった点などもあり、地味であっても身近な事柄から改善していくことの必要、つまり「隗より始めよ」ではないが、一つ一つ謙虚に受け止めて工夫や改善をしていくことが大事であると考えている。授業開始、終了時の起立礼の有無、礼を行うまでのやり方、授業中における学生の注意の仕方一つとってみて

も、授業自体の雰囲気や学生のモチベーションが一変することを実感した。

筆者の所属する学部では、フレックス制をとっていることもあって、社会人学生も一定数在籍している。社会人学生は見る目も肥えているため、授業後に講義内容に対する鋭い質問以上に、ときおり手厳しい授業評をいただくこともある。そうした評に負けぬよう、教材研究も含め、楽しくそして熱く神道のことを語れるような熱意あふれる授業を目指している。その点では全く畑違いで一笑に付されるかもしれないが、テニスの松岡修造氏のような熱意、熱さが必要だと思っている。

●教員は孤独？——教員同士の連携の大事さ

効果的な授業運営、教育を行ううえでは、前述したような基礎的な教育力の向上が大事だと筆者は考えている以外にも身近な同僚の若手教員との情報交換の機会をもつことが非常に大事だと考えている。筆者が大学の専任教員になった際に痛感したのは、とにかく教員は孤独で悩みや苦しみを内に抱え込みがちだということである。筆者の担当する授業の中には、他の教員らと同様のシラバスで行う共通教育的な演習・講義もあるが、同僚教員との何気ない茶飲み話や相談によって、授業の運営方法、授業内容に関する課題や悩みが解消されたということも多い。教員同士の教育上の課題・意識の共有にもつながるものであり、授業改善へのモチベーションを保つうえでも、教員同士の自由な相談の機会を増やすことは、教育力向上のためにも意義あることと考えている。

原点回帰・新手法・そして人間力

——レイト・カマー学部の存在意義

齋藤 英里 ●武蔵野大学経済学部長

一 はじめに——経済学部の開設に寄せて

武蔵野大学経済学部は、経済学科と経営学科の二学科からなる学部として、二〇一四（平成二十六）年四月に開設された。その母体は二〇〇七（平成十九）年開設の政治経済学部であり、さらに源流をたどると、一九九八（平成十）年開設の現代社会学部にさかのぼる。

このように学部の名称は何回か変わったが、学びの対象や方法には共通したものが流れている。それは、私たちが生きている時代のさまざまな問題点を考え、その原因を社会科学の手法で究明し、改善策・解決策を提示することである。

経済学部でもこの点を受け継ぎ、より豊かでより良い社会を実現するための方法を、経済学、経営学それぞれの視点や方法に立って考えることに主眼をおいている。

二 なぜ経済学部なのか

武蔵野大学において経済学部と同じ母体から出発し、新たに開設されたもう一つの学部が法学部である。法学部設置の経緯については、本誌昨年の五月号（第三五六号）に、本学

の中村孝文副学長・法学部長による「『新世代法学部』の船出——法学教育の新たな試みと挑戦」と題する紹介文が掲載されている。その「はじめに」では、設置準備委員会の立ち上げ、文部科学省へのたび重なる訪問を経て開設にこぎつけたと回想している。この点は経済学部における開設の経緯と同じであるが、続いて中村学部長が次のように述べていることが目を引いた。

関係者による議論の中で、われわれの念頭を離れなかったことは「なぜ法学部なのか」という問題意識であった。法学部を取り巻く昨今の厳しい環境を考えると、そのような問いが発せられたのも当然である。だがこの問いとそれに対する法学部関係者の回答は、経済学部にとっても学ぶところが多い。確かに、経済学部には目下のところ法学部ほどの激しい逆風は吹いていないかに見える。だが、こうした状況が長く続くとはかぎらない。すでに少子化による二〇一八年問題は、目前に迫っている。

しかし、経済学部開設の今日的意味を考える本質は、そこだけにあるのではない。経済学部は、すでに日本のさまざまな大学にある。そのカリキュラムを見ると、日本はもちろん



のこと、世界中の大学でも似た内容となっている。こうした状況にあつて、今なぜ、このアジアのなかの、この日本の、この東京の、この武蔵野大学において経済学部を立ち上げるこの意義は何なのか。伝統ある多くの大学の経済学部のかかにレイト・カマーとして参入する意味、そこでいかに独自性を発揮できるかなどを考える必要があるのではないだろうか。実際、オープン・キャンパスで何人かの受験生から聞かれたのも、武蔵野大学経済学部の特徴とは何かという点であった。

三 教育理念

その答えは、教育理念にある。武蔵野大学は浄土真宗本願寺派の宗門関係校として、仏教精神を建学の精神に掲げている。本学ではどのような学部であれ、その精神が教育の根幹に据えられている。この点では、仏教と経済学、経営学は一見無関係に思えるかもしれない。前者は人間の精神面、後者は物質面を扱うからである。

だが経済学の本来の姿は、人間のモラルと深く関わっていた。経済学の始祖アダム・スミスは、実は道徳哲学（モラル・フィロソフィー）の研究者であり、人間の経済活動もモラルの一環として論じられている。経営活動においても、倫理や共生は重要である。日本資本主義の父と呼ばれ、明治期に数々の会社を設立した渋沢栄一は、〈義利合一論〉を唱えていた。東西の先人の思想は共通している。しかしその後、経済学も

経営学も著しく専門化・高度化する一方で、こうした学問の原点は見失われがちになってきている。

このような状況に対して、精神的基盤を重視する武蔵野大学の果たす役割は大きい。本学部では、経済学、経営学の原点を見つめ直し、そこで習得した知見や方法を土台に、人間の持続的発展と共生を目指す市民を育成したいと考えている。それは、〈暖かな心と冷静な頭脳〉をもち、明晰な論理性と豊かな感受性の双方を備えた人間でもある。

四 カリキュラムとその特徴

武蔵野大学経済学部のカリキュラムは、主として全学共通基礎課程（「武蔵野BASIS」）「コア科目」「学科科目」「資格対策科目」「隣接科目群」などから構成されている。「武蔵野BASIS」の特徴については、前掲の法学部の紹介文に詳しく書かれているのでご覧いただきたい。ここでは主に「コア科目」と「学科科目」について紹介する。

「コア科目」には「共生原理」を配置している。これは、「武蔵野BASIS」とともに全学的必修科目であり、学生は建学の精神の仏教精神をここで学ぶ。経済学部において共生思想のもつ重要性については、前述したとおりである。

「学科科目」の特徴として、以下の三点を挙げたい。

第一に、段階的・系統的に科目が配置されている点である。具体的には、経済学科では「学科基礎科目群」「基幹科目群」「展開科目群」「応用科目群」「最先端研究」が配置されてい

る。経営学科もほぼ同様に「基礎科目群」「学科基礎科目群」「展開科目群」「応用科目群」「最先端研究」という構成をとっている。両学科ともに入門から応用まで順を追って履修できるような工夫されており、恣意的になりがちな履修形態を極力回避する狙いがある。

第二に、両学科ともに卒業後の進路目標に即した履修モデルを用意し、有効な学習ができるような工夫されている。そのため、学生は入学前後から、自分自身の生き方と将来に対する明確な目標を設定することが求められる。これによって、主体的な学習態度を喚起する狙いがある。

第三に、両学科の関連性と独自性が明確になっている。多くの科目は、二つの学科で「隣接科目」として履修できる。経済学科には、「経済学・経営学を学ぶための数学入門」が一年次の「基礎科目群」に、さらに「展開科目群」に「データで学ぶ経済学」が配置されている。ここには、数学やデータ分析を重視する同学科の特徴が示されている。経営学科には「基礎科目群」に「企業と社会」が配置されている。企業を単なる利益追求の機関としてではなく、社会のなかに位置づけ、その意味を考える同学科の姿勢が現われている。同学科の「展開科目群」には、「現代ビジネスの最前線」という、他の大学ではめったにない科目もある。これは現場で活躍している経営者の方々によるオムニバス講義であり、生きた事例の見学も体験できる。

正規のカリキュラムのほかに、経済学部ではエグゼクティ

ブ・スカラシップ・プログラムが設置されている。これは公務員（経済学科）、公認会計士・税理士（経営学科）をめざす学生を対象とした特別編成クラスであり、政治経済学部から引き継がれたものである。今年度は、同プログラム受講生のうち三名が公認会計士試験に合格している。

五 手法の新しいさ

旧来の座学型講義に代わって、双方向型講義の重要性が語られるようになって久しい。そのためにも、経済学部では各教員がITなどの新しいツールを積極的に導入している。あらかじめ講義用の資料をMUSCAT（学生専用の電子掲示板）にアップロードし、学生に対し予習・自習の便宜をはかっている点などはその一例である。学生はノート・パソコンを持参し、日々の講義や自習にそれを活かすことが求められる。教員と学生が情報検索やデータ解析などを双方向で行うことで、講義や演習が活性化する効果も生まれている。デジタル書籍や教材も、多くの教員が積極的に活用している。eラーニングの重要度は、ますます高まるであろう。次年度からは、新たな無線LANシステムの整備もはかれるようになる。最新の学部にあわせて、日々進化する新しい学びの形態を積極的に導入したい。

六 立地の利点

学生は一年次には、古き本学の面影が残る武蔵野キャンパ

スで学ぶ。自然に恵まれた武蔵野キャンパスにおいて、他学部との学生とも交流しながら、学生生活の基礎を築く。二年次以降は、本学の新しい象徴である有明キャンパスで学ぶ。都心各地へのアクセスが良く、流通の拠点としてさまざまな企業が集積する有明は、経済活動の実体を学ぶ宝庫であり、特に五年後の二〇二〇（平成三十二）年に開催される予定の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、急速に変貌する首都の姿を実感することができる。

アクセスの良さは、外部から講師を招請し、特別講義や講演会、各種セミナーを行える利点もある。すでに二〇一三（平成二十五）年には、内外のパネリストを招いて経済学部開設記念シンポジウムを開催した。経営学科での「朝活」や「経営セミナー」は、社会人を対象とした企画として評価が高い。今後も附置機関である政治経済研究所と連携し、さまざまな企画を予定している。教育研究成果の一端を社会人や周辺企業に発信する意味でも、立地の良さは欠かせない。

七 おわりに——将来の展望

どんなに立派な理念を掲げ、立地条件や施設に恵まれ、体系的なカリキュラムを整備し、新しい手法を導入しても、それを活かす人材がなければ教育は画餅にすぎない。教育・研究の根底にあるのは人間力であり、これこそが大学の最終的な決め手となるのではないか。同じ内容でも、教える教員の魅力によって、学生に対する知的関心の喚起度は異なる。そ

の点でも、武蔵野大学でしか学べないことは多々ある。

経済学部では講義のフォロー・アップや各種相談のため、オフィス・アワーが設けられ、教員の研究室は可能な限り学生に開かれている。研究室での指導や語らいによって、教室ではなかなか聞くことのできない学問のおもしろさを学ぶこともできる。これは他学部でも同様であり、武蔵野大学の良き伝統である。

将来、経済学部は卒業生をどのような分野に送り出すのであろうか。激しく変動するこの現代社会にあって、数年先の予測さえたやすいことではない。だがどんなに社会が大きく変化しても、それに振り回されることなく、普遍的・科学的な視点でさまざまな事態を冷静に見る方法を身につけることが大切である。経済学部での学びが、その基礎力になることを願う。

大学教育は、卒業生を送り出すことで終わるのではない。それはある意味、新たな始まりでもある。無数にある経済学部のなかで、この武蔵野大学で出会った私たちは、一生を通して交流できる仲間でありたい。レイト・カマーであるにもかかわらず、いやレイト・カマーであるからこそ、過去の歴史を振り返り、学ぶことの原点を見つめ直し、進化する手法を大胆に取り入れることができる。その土台となるのは、人間力である。人間を大切にする教育が行われる学部であり続けたい。

信念を貫き、自ら学び、実践する

創立者成瀬仁蔵



一 はじめに

本学は、日本の近代教育制度がほぼ確立する時期に創立された。当時の教育政策では、初等教育は男女の別なく奨励されたものの、女子の場合あくまでも将来の母として、子どものための就学奨励であった。さらに男女の役割の違いを背景に、中等教育以降は男女別学体制が徹底され、女子中等教育は未整備で、私学が

その役割を担った。その後公立の高等女学校が整備されていくが、女子教育は中等教育止まりで、それ以上のレベルの学校としては教師養成のための女子高等師範学校があるのみであった。女子高等教育については無用論や時期尚早論が大勢を占める中、女子高等教育の必要性を訴えて本学は設立された。それ以来、私学の女子高等教育機関としてさまざまな独自の教育実践を展開してきた。

本学の教育の原点にあるのは、創立者成瀬仁蔵の教育理念であり、その実践である。成瀬は、従来の女性観に基づく固定的で狭い女子教育ではなく、近代日本社会のみならず世界をも視野に入れた先駆的な教育実践を展開した。さらに、創立時から女子総合大学構想を掲げ、その理想のもとに三学部体制ではじめ、その後も学制の改革に取り組んでいる。

本学は、旧制の専門学校令による日本女子大学校時代を経て、現在は二キャンパス、四学部一五学科、すべての学部学科に大学院が設置される女子総合大学へ

と歩んできた。

二 日本女子大学の創立

創立者成瀬仁蔵（一八五八―一九一九年）は、幕末に長州藩士の長男として生まれた。山口県教員養成所に学び、小学校の教員となった。同郷出身の牧師、澤山保羅との出会いが転機となり、成瀬は受洗し、のちに牧師となった。宣教活動の傍ら、女子中等教育に携わったことが女子教育との出会いと言える。一八九〇年から三年間アメリカに留学し、女子教育研究を目指しながらも、宗教研究をはじめ幅広い研究、視察、体験を通して女子



家政学部の実験

子大学構想を練ったものと考えられる。帰国後に自身の女子高等教育論をまとめた『女子教育』を出版し、それを携えて女子大学設立運動に奔走した。一九〇一年四月に日本女子大学校（以下、本校）は開校した。

本校の教育方針は『女子教育』にある

ように、女子を「一、人として教育すること、二、婦人として教育すること、三、国民として教育すること」とされ、この順序が重要とされた。開発主義の教育方法が取り入れられ、学生の自主的・自動的な姿勢を養成し、自ら学び、研究し、実践することを重視する「自学自動」が徹底され、今日まで継承されている。また、本校の将来像として、大学部にあたる「本科」（七学部）と、より高度な「研究科」からなる総合大学像と幼稚園、小学校、高等女学校も附置した一貫教育が提示された。なお、創立時には家政学部、国文学部、英文学部で発足し、同時に附属高等女学校が開校した。

創立当時、高等教育を待ち望んでいた年齢も経歴もさまざまな学生たちが全国から集まり、寮生活を共にしながら勉学に励んだ。講師には、本校の教育方針や設立の趣旨に理解がある著名な人々が名を連ねた。教育内容では、各学部の必修科目以外に他学部の科目も選択科目として置かれ、学部を超えて幅広く学ぶことが奨励された。

全学生の必修科目で「人としての教育」、すなわち人格教育の中核となったのは、成瀬校長自身による「実践倫理」の講義である。実践倫理は純粹な倫理学とは異なり、時々刻々起こってくる社会の諸問題がテーマであるとして、講義の内容は宗教、思想、哲学、教育、科学、芸術、時事など多岐にわたった。それは学生に近代社会のさまざまな問題への啓発となり、現状を改変する実践を促すものであった。また、学生それぞれに一人の人間として実現すべき目標を問い、学生

に強い影響を与えた。

三 教育体制の充実と新たな実践

創立から五年後、森村豊明会の支援を受けて新たに教育学部が開設され、教育体制の拡充が図られるとともに、その実習場として附属の豊明幼稚園と豊明小学校が開校し、一貫教育体制が確立した。教育学部では、女子教育で軽視されていた理科系科目（数学、物理、化学、博物）を充実させたカリキュラムが編成された。しかし、女性の理科教育に対する理解不足もあり、入学者は減少し、間もなく家政学系の家事科中等教員無試験検定資格取得が可能な学部に変換された。

同時期に、高等教育における初の夏季寮「三泉寮」が軽井沢に開寮した。夏季休暇に学校を離れ、学生それぞれが自らを問い将来を考える場、その後の活動の活力を生み出す場となった。これは形を変えながら今日まで継続されている。また一九〇九年には、通信講義録『女子大学講義』が発行され、成瀬をはじめ学内外の著名な人々が各専門分野を執筆している。これは成瀬の大学拡張運動の一環であり、日本における女子高等教育レベルの通信教育の先駆けとなった。

創立一〇年を経て、専門学校から大学に向けた準備が始まり、まず学則が改定され、より幅広い科目選択制度が導入された。あくまでも学生の興味関心を重視した選択制度で、それにより所属学部が決定した。また将来的に開設したい学部として文科系八学部、理科系三学部、実学科系（家政科系）

五学部が示されたが、当面は家政学部、師範家政学部（旧教育学部）、国文学部、英文学部の四学部となった。

一方、成瀬は、文部省の教育調査会や内閣直属の臨時教育会議の委員として、女子教育に関して積極的に意見を述べた。特に後者では、著書『女子教育改善意見』を配布し、女子高等教育の必要性を強調し、女子総合大学構想を示した。それは、一貫して重視してきた人格教育を大学教育の中心に置き、家政学科、宗教学科（文科）、医学科の三中心学科とそれに関連する四から五学科編成の私案である。しかし会議の答申に成瀬の主張はほとんど入れられなかった。

そのころすでに成瀬は発病しており、病状が悪化する中で「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」を書き残した。これらは本学の教育の三綱領として受け継がれている。「信念徹底」はまさに人格形成の基本であり、それを徹底することによりその人の個性が明確になり、自ら創生に向かって実践が展開する。「自発創生」である。その個性が相互に尊重されたうえに、「共同奉仕」の社会の成立が目指されている（中畠邦『成瀬仁蔵』）。ここに示された教育精神は、創立以来の教育方針、教育実践の中にあり、それが総括されたものと言える。

四 創立精神の継承と展開

成瀬の死去により、共に本校を支えてきた麻生正蔵が第二代校長となった。大正デモクラシー期の社会情勢や社会的実

践を重視してきた創立精神の継承から、一九二一年に社会事業学部が他に先駆けて開設された。本学部には児童保全科と女工保全科が設置された。前者は乳幼児死亡率の高さと児童の心身の健全な発達への対応、後者は女子労働者の増加とその労働条件の改善が、社会的に問題となっていたことを受けたもので、その社会事業に携わる専門家の育成を目指した。卒業生の多くが社会事業の第一線で活躍し、社会的な貢献を果たした。

また創立者の女子総合大学実現の願いを受け、すでに卒業生の募金活動が開始されていたが、総合大学用の建物が竣工し、一九二七年に総合大学予科として高等学部（文科、理科）が開校した。当時の大学令では女子大学は認められなかったが、創立以来の念願であり、女子教育の高度化による女性の地位向上を目的として発足した。高等学部開校から三年後、大学本科が開校した。しかしこの大学制度は、その後も文部省の方針に変更はなく、財政的な問題もあつて短期で中止されることになった。一九三一年度より高等学部の募集が中止され、専門部のみの募集となり、学部構成は家政学部第一類（旧家政学部）、家政学部第二類（旧師範家政学部）、国文学部、英文学部、社会事業学部の五学部となった。一連の責任をとって麻生校長が辞職し、渋沢栄一第三代校長を経て、第四代校長に初めて卒業生の井上秀が就任した。

目白校地を取り巻く環境の変化やその狭さが問題となり、総合大学実現のためにも新しい校地が検討され、現在の川崎

市多摩区西生田に決定した。戦時体制が強まる中、一九四二年に創立四〇周年を記念して、西生田校地で新校舎落成披露と祝典が挙行された。同年より家政学部第一類と第二類の四年生、国文学部と英文学部の二年生が西生田で学び始め、勤労奉仕も活発になった。地元の農村の援助にも取り組み、農繁期託児所開設、共同炊事の指導を桜楓会員の応援も得て実践した。その後急激な戦局の悪化により、西生田校地での総合大学構想は頓挫した。戦時動員も厳しさを増し、本校は教育機関としての機能を果たせない状況で敗戦を迎えた。

五 日本女子大学の誕生

敗戦により日本は連合国軍の占領下に置かれ、民主化のための諸改革が進められ、教育面でも大幅な刷新が図られた。教育基本法、学校教育法をはじめとする主要な教育法規が制定され、男女の教育機会均等、男女共学が認められ、従来の男子系大学も女子の入学を認めることになった。女子大学としての大学昇格を求めてきた本校は、大学認可を文部省に申請した。しかし、男子系大学には設置されていない家政学部の存在が問題とされ、すぐには認可されなかった。そこで女子大学連盟などで運動を展開し、CIEの女子高等教育担当者の助言も得て、一九四八年四月、念願の日本女子大学が誕生した。

大学は、目白校地に家政学部（児童学科、食物学科、生活芸術学科、社会福祉学科、家政理学科一部、家政理学科二



の移行により五学科に、家政学部は生活芸術学科が住居学科と被服学科に分立し、家政経済学科が新設されて七学科になった。

教育の充実を図るために、教育施設・設備などの環境の整備が行われ、建物の新築や増改築が進められたが、特に学生の自主的な学びを促進するため、全館開架式の新図書館が開館した。

日本女子大学の教育の原点は、言うまでもなく創立者の教育精神にある。創立以来本学の精神教育の中心にあった全学必修科目「実践倫理」の講義は、学長をはじめ学内外の講

部」と文学部（国文学科、英文学科、史学科）、二学部九学科で出発した。翌年には日本女子大学通信教育部（児童学科、食物学科、生活芸術学科）が開講し、成瀬の大学拡張が戦後に継承され本格的に再開された。その後教育体制が刷新され、文学部は教育学科の新設と社会福祉学科

師が担当して継続され、一九六六年度より名称を「教養特別講義」と変え、講義録『日本を見つめるために』を刊行している。また、創立七〇周年記念事業として『成瀬仁蔵著作集』の刊行が一九七四年から始まり、全三巻が刊行された。創立者の教育精神の理解と継承発展のためのよりどころとなるものである。

教育・研究の高度化に対応して大学院の整備が進められ、各研究科に徐々に博士課程まで設置され、充実が図られた。また、農家生活研究所、児童研究所、女子教育研究所などの特色ある研究機関が設置された（現在は総合研究所として統合されている）。一方、海外の大学との交流や留学制度の確立のための体制の整備も始まった。

六 新学部の開設と総合大学

一九九〇年、西生田校地に人間社会学部が新設された。総合大学として新学部構想が具体化し、創立九〇周年の記念事業として人間社会学部の設置が決定した。本学では一九二一年に他に先駆けて社会事業学部が開設され、それ以来名称を変えながらも社会福祉系の学部・学科を存続させてきた。新学部は「激動する現代社会の変化に対応しながら、一人ひとりを尊重する社会の創造に積極的に参加する人材を育成する」学部として誕生し、現代社会学科、社会福祉学科、教育学科、心理学科、文化学科の五学科で構成された。社会に開かれ、地域との連携を進める学部として、川崎市を中心に地



域活動やボランティア活動を展開し、西生田生涯学習センターを拠点として生涯学習事業にも力を入れている。

もう一つの創立九〇周年事業として、一九九二年に私立の女子大学では初の理学部が開設された。新制大学となって家政学部には家政理学科一部、家政理学科二部が設置されていたが、家政学部から独立させ、それを母体として理学部の数物科学科、物質生物科学科となった。

人間社会学部と理学部が誕生し、総合大学構想のもとに創立された本学は、人間生活科学、人文科学、社会科学、自然科学の四分野の学部・研究科からなる、名実ともに総合大学となったと言える。

その後創立一〇〇周年を機に、百年館の建設、二一世紀を迎えた学園の歴史に関する研究や出版が進められた。また、二〇〇七年より大卒女性のためのリカレント教育課程が発足し、再教育や再就職支援を実施している。翌年には現代女性キャリア研究所が開設

され、女性キャリアをめぐる課題解決に向けた研究に取り組んでいる。

七 おわりに

本学は間もなく創立一二〇周年を迎えようとしている。二〇一一年に「Vision 120——創立一二〇周年に向けて」を発表し、一二〇周年時までに目白校地にキャンパスを統合し、新たな発展を目指すことになった。現在、教育改革の基本方針のもとに、改革の具体化とその実現のためのキャンパス整備に取り組んでいる。

少子化による一八歳人口の減少と大学選択における共学志向の高まりなどにより、女子大学を取り巻く環境は厳しさを増している。本学には、創立者の先駆的な教育精神を現代に生かし、女子大学としての特色を発揮し、さまざまな教育課題に挑戦することが求められている。女性の可能性と将来に限りない期待を抱き、女子高等教育を実践した創立者がそうであったように、従来の枠にとらわれず、世界を視野に、多様に、柔軟に改革を進めていくことが急務であろう。女子総合大学として「信念を貫き、自ら学び、実践する」女性の育成が本学の責務である。

●参考文献

・『日本女子大学学園事典——創立一〇〇年の軌跡』日本女子大学、二〇〇一年

地元の産学連携による 街おこしサワールの開発

—立正大学吉田ゼミ発「E杏サワー」と「ポンチサワー」—

清水 幸代 ●立正大学総務部研究支援課長

平成二十六年春。立正大学品川キャンパスが立地する東京都品川区の五反田商店街の仲介により、本社が品川区の「永昌源」、お隣目黒区の「博水社」、そして「キリンビール」と立正大学がタッグを組み、若者向け「品川・目黒の街おこしサワー」のレシピ開発に着手した。

「若者の酒離れ」が言われて久しいが、地元五反田の飲食店からも「学生が街でお酒を飲まなくなった」という声を聞くようになった。店が繁盛しないとメーカーの売り上げも下がる。そのため、産学連携で既存商品の新しい飲み方・売り方を提案し、地元飲食店の前向きな取り組みという話題性を生むことで、品川・目黒区エリアの活性化を目指す今回のプロジェクトが始動した。このプロジェクトは、学生にとって商品開発や営業販売など、企業の現場を実際に学べるという点でメリットがあるものだった。そして、このプロジェクトの実施に手を挙げたのが、経営学部経営学科の吉田健太郎

准教授と三年生のゼミ生たちである。

街の活性化のため、吉田ゼミの学生たちは、コンセプトを「大学生が社会人になったときに乾杯したいお酒」とし、ターゲットを「新社会人を中心とした若者」に決定した。

学生に任されたのは、新商品のレシピ開発だけではなく、名称決定、販促物の作成、SNSを利用した販売宣伝活動、店舗への営業活動など多岐にわたった。レシピには永昌源の「杏露酒」と博水社の商品を使用すること、販促物は企業の倫理チェックをうけるという条件があったものの、ほかは学生たちに任された。新開発レシピの発売目標は一〇月中旬に決定。一二月の忘年会シーズンに、品川・目黒区の飲食店を中心にレシピの取り扱い三〇店舗を目指すことも決めた。

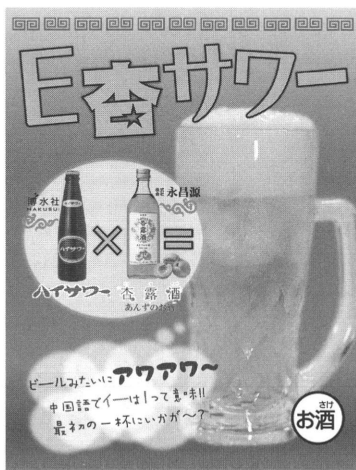
学生たちは、このプロジェクトのために二名の総括リーダーのもと、商品開発と販促の二チームを置き、さらに商品開発チームのもとにはティスティング班とアンケート班を、販促チームのもとにはSNS・WEB班とPOP・ポスター班を置く組織をつくった。そしてアンケート班を中心に、若者の好みを知るための試飲会を実施。一三二名の学生・社会人からアンケートをとり分析を行い、二つのレシピ案を考案した。

学生たちは、コンセプトから「乾杯ビール」というイメージをもっていた。だが、アンケートから、ビールを好む女

締めの一杯 ポンチサワー



最初の一杯 E杏サワー



性は少ないことがわかった。そこで、宴会の乾杯（一杯目）
 Ⅱビールという場面でも違和感がなく、「誰でもおいしく飲
 むる最初の一杯」としてビールによく似た「E杏（イーアン）
 サワー」を考案した。E杏サワーは、「五反田の五」という数

字に注目し、

Eがアルファ
 ベットの五番
 目の文字であ
 る」こと、「イ
 ー」は中国語
 で「一」という意
 味から一杯目
 の酒にふさわ
 しいという意
 味でつけられ
 ている。

さらに、学
 生たちはアン
 ケートから女
 性の「友情」
 に注目。商品
 コンセプトを
 「デザート感
 覚で飲む締め

の一杯」とし、友人らとお酒を飲む女性をターゲットに、一
 日をリフレッシュできるデザートのようなお酒、フルーツポ
 ンチをイメージした「ポンチサワー」を考案した。ポンチサ
 ワーも、ポンチがヒンドゥー語で「五」という意味から、五
 反田の五とかけてつけられた。

しかし、ここまで来るのは決して平坦な道のりではなかつ
 た。コンセプトをもとにレシピを考案したものの原価が高す
 ぎたり、飲食店側のキッチンコントロールを考慮できていな
 かったり、販促物の製作では企業の倫理規定に抵触するなど、
 思いどおりにならないことも多かった。それでも、学生たち
 は先生や企業の担当者など関係者にアドバイスをいただきな
 がら、一つずつ乗り越えていった。吉田准教授も、企業と直
 接コミュニケーションを図りながら企画をやり抜く経験は何
 よりも学生の財産になると話している。企業の担当者も、最
 初は営業先の飲食店で商品の説明も難しかった学生が、今で
 は積極的に店のドアを開け、そのお店に適していると思われ
 る商品を選んでお勧めをするまでになった、と話す。学生自
 身も、ゼロから商品を作り上げた達成感を得ているようだ。
 現在、学生たちは五反田・大崎を中心とした品川区と西小
 山を中心とした目黒区の飲食店などへ営業を行っており、目
 標の三〇店舗をクリアする三七の飲食店にレシピを採用して
 いただいている。さらなる目標は大きく上げて五〇店舗。
 品川区・目黒区にいらした際は、ぜひこのサワーを飲んで
 いただきたいものである。

清酒・勝馬米

久保 幹 ●立命館大学生命科学部教授

日本の農業を活性化したい、そして日本の食文化を伝承・発展させたいという思いから、わが国の伝統的な循環型社会を原点とする研究理念を掲げ、教育研究活動を行っている。土壌中の微生物による物質循環を定量的に評価し、土壌の健康診断をする技術である「土壌肥沃度指標」(SOFIX: Soil Fertile Index)は、独自に開発した技術の一つである。この技術を基盤として、地域に存在する有機資源を有効に使い農地を肥沃にする、そして農産物の収量や品質を向上させる基盤研究とその実装に取り組んでいる。

立命館大学の近郊に位置する日本中央競馬会栗東トレーニングセンターからは、毎日大量の馬有機堆肥が排出される。SOFIX技術によりこの堆肥を分析すると、非常に良好な有機肥料成分を含んでいることが明らかとなった。この結果は、ドーピングなど厳格に規制されている競走馬由来の排出物は、薬剤の混入が皆無であり、堆肥発酵に適していることが示唆された。また馬有機堆肥は、古くから良質な有機肥料

として知られており、これらを裏づける結果ともなった。

この馬有機堆肥をSOFIXデータに基づいて適切に施用することで、肥沃な水田をつくりだすことができた。そして農地環境にこだわった水稻栽培を開始したのである(二〇一〇年より)。

収穫したコシヒカリは、整粒、形質などに優れ、品質検査の結果、一等の品位の評価を獲得した。現在、環境にこだわったおいしいコメとして継続的に販売するに至っている。

今回、そのこだわったコメを用い、産・学・農が連携して清酒製造に取り組んだ。そして「超特撰白雪・純米大吟醸・必勝の酒・勝馬米」が誕生したのである。清酒・勝馬米は、「環境に配慮した農業を創る」「日本文化を伝承・発展させる」「良質な清酒を醸す」、そして「地域を元気にする」というこだわりをもって開発した清酒である。

《環境に配慮した農業を創る》

化学肥料の連続的な使用により、農地及びその周辺環境は疲弊している。琵琶湖を抱える滋賀県では、水田から流出する化学肥料成分により琵琶湖が富栄養化し、大量の水草が繁茂するようになっていく。これは深刻な地域環境問題である。環境負荷が少ない有機農業が求められている今、地域にある



有機資源を有効に使い、環境に配慮した科学有機農法を実践し始めた。この農法で収穫されたコメが清酒・勝馬米の原料である。

《日本文化を伝承・発展させる》

日本酒は、日本の食文化を代表する逸品の一つである。原材料の吟味から醸造手法（並行複発酵）まで、世界に類を見ない唯一の無色透明な発酵酒である（ワインやビールなどの発酵酒は透明であるが着色している。一方、日本酒は発酵酒であるにもかかわらず無色透明である。そのようなことから、日本酒は清酒とも呼ばれている）。清酒・勝馬米は、四五〇年の清酒醸造を誇る小西酒造株式会社と詳細な議論を重ね、

産・学・農の連携により生み出された清酒である。

《良質な清酒を醸す》

日本酒の伝統を継承しそして発展させるため、「誰も歩いていない道に行く」という小西酒造の社是のもと、通常酒造米としては使わないコシヒカリを用いた大吟醸酒の醸造に挑戦した。また、このコシヒカリは、環境に配慮した肥沃な水田と清らかな環境水のもとで栽培されたコメであり、厳選された原料を使っている。その結果、薫り高くまろやかな「超特撰白雪純米大吟醸必勝の酒・勝馬米」が誕生した（二〇一三年より）。

《地域を元気にする》

有機農法に土づくりの科学的指標を与えるSOFIXを活用し、地域の特色である馬有機堆肥を用いてコメ作りを行った。さらにそのコメを用い、清酒を醸して社会に提供したことは、産・学・農の連携による新しい形の六次産業化モデルである。地域の活性化を意識した取り組みであり、継続して取り組んでいきたい。

このように清酒・勝馬米は、従来の産・学連携に新たに農が参画した新たな取り組みである。清酒の伝統と新しい可能性を感じていただける商品ができたと確信している。ぜひご賞味いただきたい。